

里地里山保全・再生の特征的取組 個票 A (対象地域の概況)

N0.87			龍谷大学「龍谷の森」		生物地理区分		アカマツ林	
					地域区分		都市周辺	
所在地	都道府県	滋賀県	地形条件	1.山地	2.山麓部	3.丘陵・台地		
				○ 4.低地	5.その他			
	市 町 村	大津市	環境要素	◎ 1.二次林	2.草地	3.水田		
				4.畑	5.小川・水路	6.ため池		
	集落名称等	瀬田大江町		7.池沼・湿地	8.社寺林	○ 9.人工林		
		10.その他						

環境要素（対象とする地域に含まれる環境要素）

◎：面積割合が最大のもの ○：それ以外の環境要素

自然環境・景観保全、国土保全関連の法指定状況	自然環境、景観、文化等の観点からの選定・評価
保安林	
特徴的な動植物や生息環境	対象地の景観の現状
古琵琶湖層の地層からなる瀬田丘陵の一角にある放棄里山林であったが、龍谷大学や市民による研究・保全活動により多様な里山環境が生まれつつある。優占する樹種は、コナラ・アカマツであるが、ナラ枯れ・マツ枯れの被害拡大による樹木相の推移が予想される。龍谷大学の調査により、滋賀県絶滅危機増大種のオオタカや、コナラおよび菌根菌と共生関係を持つエンシュウムヨウランなどの生育地であることが明らかになっている。また、コンイロイッポンシメジやウスキキヌガサタケ等の多様なキノコ類も観察される。	写真集などの出版物がある 観光パンフレット等に写真が使用されている 景観関連調査（文化的景観等）の対象地となっている 森林観察タワーから、琵琶湖や田上山地を展望することができる。

	
写真の説明： 龍谷の森に設置された森林観測タワーから見た林冠、夏(左)と冬(右)。	写真の説明： 龍谷大学学生と市民が協働してコナラを利用したシイタケの原木栽培に取り組む。

里地里山保全・再生の特徴的取組 個票B（対象地域の取組）

取組主体 ◎：主な主体、○：その他の主体

NO.87		龍谷大学「龍谷の森」		取組主体	1.地域コミュニティ(集落・組合等)
所在地	都道府県	滋賀県			◎ 2.団体・企業・学校等
	市 町 村	大津市			3.行政による支援施策の活用
	集落名称	瀬田大江町			○ 4.多様な主体が参加・連携する組織体
					5.その他

取組 主体	主な主体の名称		龍谷大学・里山学研究センター		
	その他の主体の名称		『龍谷の森』里山保全の会・おおつ環境フォーラム<里山プロジェクト>		
目的 ●：主 ○：その他	●	3.環境教育や自然体験、エコツーリズムの場としての利用			
		自然観察会	＊	『龍谷の森』里山保全の会・おおつ環境フォーラムの活動の一環として、おもに龍谷大学の研究スタッフを講師とした自然観察会を年数回行う。	
		環境教育・学習活動	＊	龍谷大学の授業・実習の活動の場であるとともに、学内・学外の研究者による里山研究の調査地としても活用されている。また、小中高等学校の野外学習等も行う。 支援措置：文部科学省「平成21年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」	
		里地里山体験・環境保全	＊	林内に生育するコナラを利用して、シイタケ・ナメコ等の食用キノコの原木栽培に取り組んでいる。また、落ち葉堆肥づくりや炭焼きも行っている。	
		農林業体験活動			
		エコツアー			
		その他			
連携・協働による取組 内容・役割分担等			龍谷大学の教員や学生が里山の生態系について教育・研究活動を推進している。また、龍谷大学の学生サークル・『龍谷の森』里山保全の会・おおつ環境フォーラムが里山保全活動を行っている。さらに、大学の学生実習と市民による里山保全活動を共同で行うことで、里山保全活動を通じた学生と市民の交流を図っている。		
取組の特徴や強調したい点			龍谷大学では、文部科学省の支援を受けて里山研究プロジェクト「里山学研究センター（前里山学地域共生学オープン・リサーチ・センター）」を設置した。学舎に隣接する約38haの面積の森林（龍谷の森）を里山研究の中心フィールドとして利用しながら、さらに生態系保全と環境教育及び市民参加の里山活動を通じて、現代的な里山利用モデルを構築し、全国に発信することを目指している。		

取組の概要	大学所有の里山林で市民参加の保全活動、新たな利用モデルを模索	課題グループ ●野生生物 ●学習体験
事例の特性	大学での取組を通じた市民の認識向上	
取組の中で他の地域の参考となる点	森を持つ大学が「里山学・地域共生学」との位置付けのもと、行政・市民とのパートナーシップにより生態系保全と環境教育及び市民参加の里山活動を実施。新たな里山利用モデルを構築し、全国に発信することを目指している。	